



井坂 直幹 いさか なおもと

生まれた場所：茨城県水戸市
生まれた年：1860年
なくなった年：1921年

木材産業に新しいやり方を取り入れた実業家

井坂直幹は、今から140年以上前の1860年、茨城県水戸市に生まれました。お父さんは武士でしたが、まずしい家でした。直幹は、昼はお母さんを助けて田畑ではたらき、夜は水戸の塾（学者が開いていたもの）に通って勉強をしたそうです。

そんながんばりが、まわりの人にみとめられて、直幹は、福沢諭吉にしょうかいされました。そして諭吉の助けを受けて、慶応義塾大学で学ぶことができました。慶応義塾大学を一番のせいせきでそつぎょうしたあと、直幹は新聞記者となり、その後日本土木会社という会社に入ります。そして木材にかんけいした仕事をするために、29歳のとき、秋田県能代市へとやってきました。

その当時、能代では木材の仕事は、むかしながらのやり方で行われていました。山にある木を売ったり買ったりするときには、本数をきちんと数えなくて、だいたいの考えで値段を決めたり、きちんとした大きさの板にそろえないで、てきとうな大きさの板を作ったりしていました。ですから秋田で作られた木材や板は、ひょうばんが悪く、あまり使われていませんでした。

直幹は、そのようなむかしのやり方をかえようと思いました。きちんと本数を数えて値段を決め、同じ大きさの板を作ろうとしたのです。ところが、むかしのやり方になれている人たちは、さいしょは直幹のやり方にしたがおうとはしませんでした。ときには、直幹の家に火がつけられるなど、ひどいやがらせを受けることもありました。しかし、直幹はあきらめませんでした。

直幹は、ただ口で話すだけでなく、自分も工場ではたらきながら新しいやり方をしめました。その新しいやり方は、少しずつ、能代の人たちの心をかえていきました。

37歳のとき、直幹は能代材木合資会社という自分の会社をもちます。この会社で直幹は、前々からの夢であった機械による製材（機械を使って、木を決められた大きさに切ること）に取り組みました。いろいろなくろうはありましたが、機械によって決められた大きさや厚さに切られた秋田杉は、日本中で使われるようになり、会社は大きくなっていきました。

47歳のとき、直幹はたくさんあった会社を、秋田木材株式会社にまとめました。

この「秋木」は「東洋一（日本、中国、インドなどをあわせた地域で一番）」と言われるほどに大きな会社となりました。直幹は、会社を大きくする一方で、はたらく人の生活がよくなるようなさまざまな工夫をしたり、まずしい家の子どものでも上の学校へ進めるような奨学金の仕組みを作ったりして、能代のためにつくしました。

秋田の木材にかんけいする仕事を新しいやり方にかえて、秋田杉を日本中に広めた直幹は、たくさんのおしまれながら、61歳のとき、能代で亡くなりました。能代には井坂記念館がたてられ、今も直幹は能代の人々の心の中に生きています。